第十三章　新疆所感

予が嘉峪關を踰えて新疆を横斷し、喀喇崑崙山脈を超越し了りしまでに費した
る日數、約三百日、其間親しく天山々脈に沿ふ高原を視察し、塔里木河に瀕する平野
を踏査して、耳聞目睹したる結果は、五十八萬方哩の大寶庫、古來蠻雲の鎖す所と爲
りて、空しく草萊に委し、二百萬の生靈尚ほ、瘴烟の裡に包まれて、徒に混沌として睡
眠するの憐むべき情態に在ると同時に、新疆の運命頗る悲觀すべきもの有るに想
到し、轉た感慨に堪ざるなり。請ふ少しく其の理由を說かん。

惟ふに新疆の命脈は、一に伊犂に依りて繫がれ、伊犂は實に新疆の胴腹に劃した
る一楔木にして其の死活を左右す、此楔木一たび他國の握る所と爲り、以て深く新
疆の臟腑を抉ぐらば、新疆豈に全きを得んや。清廷が特に將軍を伊犂に駐紮せし
めて、邊防に任ぜしむる所以のものは、素より偶然に非らず。然るに露國は野心を
中央亞細亞に逞うせんと欲する玆に年あり。苟も機會の乘ずべき、口實の藉るべ
き有らば、直に之を捉ふるに躊躇すること無く、之が爲めには有らゆる手段と方法